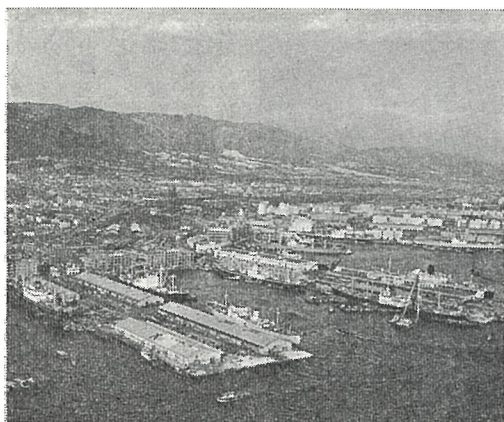




同志社

歴史散歩

神戸

奥村龍三

一

明治八年一月一日、新島先生は父新島民治宛に新年の祝詞を兼ね、学校設立の計画について書簡をしたためられている。それは、「新年の御吉慶大人様御初め御一統、無事御迎歳に候はんと祝賀奉り候。

然らば小子儀今に東京に在留、大阪表へ発足前、種々文部大輔殿（田中不二鷹）と談判致し、此度兵庫表に於て大学校相立つべき目的もこれ有り候間、その事件相成ると成らざるは未だ計り難く候へども、先づ十に七分は成就の事と存候間、大人に於かせられても御喜欣、若し此の学校出体（出来）に及び候はば、小子の十年間大人に御苦労相懸け候事も今に至り全く不孝の兎にあらざる事を御覚知下さるべく候」（以下略）

この書簡によつて、新島先生は大学設立の場所として最初に兵庫表すなわち神戸の地をあてにしておられたことがうかがわれる。それが転じて一度は大阪をその目的地と選ぼうとされたのは、先生が間もなく大阪に滞在中（宣教師ゴールドン氏宅）木戸孝允に面会、本件について相談され、その紹介で渡辺府知事

や大阪財界の有力者に懇談された結果で、それも結局実現がむずかしくなり、三転して遂に京都の地を選ばるるに至つたのである。

何故に最初新島先生は神戸を学校設立の予定地と考えられたのだらうか。私は神戸には既に明治三年以来アメリカン・ボールドの派遣宣教師デ・シー・グリーン氏夫妻が伝道を開始していたし、明治四年三月にはオー・エッチ・ギュリック氏、同年十二月ゼー・ディール・デビス氏、翌五年、ベレー氏、ゴールドン氏らが来転し、皆阪神の間に定住していたことが新島先生をして事を創めるのに相談相手になる米人の居る神戸が何かと都合だと思つたに起因したのだと思う。

二

このアメリカン・ボールドすなわち組合教会伝道の黎明期にあつて、彼ら米人宣教師に特別の便宜を与えたものは三田の開国進取主義であつた藩主九鬼隆義氏を始めとし、藩中に川本孝民、白洲退蔵諸氏のような卓見家、また越後の人で関貴造氏（後の松山高吉氏）のごときがグリーン宣教師やデビス宣教師と相交わり相識つて基督者の土台を築きつ

つあったことを新島先生も在米中から聞き及んで居られたのだと想像される（その人々は何れも同志社と深い関係に結ばれた先輩である）。

既に明治五年十二月にはデビス氏を校長として宇治野村に英語学校が設立され、生徒八十名に達していたという。

なお明治六年三月にはタルカット、ダッドレーの両女史が渡来し、続いてアッキンソン夫妻、テラー氏夫妻、バロス女史も来神し女子の教化・教育の事業に手をつけられ、右記三田藩の九鬼氏の所有である諏訪山麓の地を購入した。これが神戸女学院の濫しようである。それは明治七年のことであるから、同志社創立より一年前であった。

かかる下準備が人的にもできていたので、新島先生も基督教主義学校設立の候補地として、まず最初に思いつかれたのは兵庫県下又山手の神戸であったことが想像されるのである。また新島先生は京都に居をトされてのちも、たびたび神戸諏訪山温泉に一晚二晩静養休養されたと誌されているが、むかし諏訪山（今は動物園）麓に温泉場があり、その前に常盤館という閑静な旅館があったので、多

分、新島先生が止宿されたのはその旅館であったらうと、いつも私は諏訪山辺を散歩するたびに新島先生を思い出してそのあたりを眺めたものである。それは明治の終りから大正の頃の私の思い出である。

もし新島先生が同志社を神戸の地に創立されたとしたら、或は神戸の山手辺か、毎年のように基督教の修養会や夏期学校を催し、また宣教師の避暑地であった有馬の山間か、前記九鬼家との関係で三田の地に同志社を建てられたことも想像して見ても興味深いものである。

三

「歴史散歩」だから話題を移して見るが、母校同志社とつとも縁故の厚い教会は生田区下山手通六丁目の神戸教会であると思う。前記明治五年頃、宣教師によって改宗された関貫造氏（後の松山高吉氏）は神戸教会最初の牧師となられた人で、それは明治十三年四月で、のち新島先生の招聘をうけ、同志社に來られて理事の一人となりまた教師となり同志社のため尽瘁されたのである。同氏は聖書翻訳事業のため、また讃美歌編さんのため大い

に貢献されたし、直接間接に同志社に関係を保った方である。神戸教会の第二代目の牧師原田助氏はのち迎られて同志社の社長になられ、同志社大学の基礎を据えられた中興の祖となられたのである。同じく海老名弾正氏は神戸教会の牧師着任わずかに五年であったが多大の印象と感化を残されたのであるが、のち同志社大学の発展に多大の貢献をされたのである。私が神戸に在住したのは大正の始めから昭和十年までの二十年間で、終始、同志社校友会神戸支部の先輩の驥尾に附し、校友会の書記・幹事、また会計をつとめ多くの先輩に可愛がられた。私の人生途上校友先輩より受けた恩恵は感謝の外はない。私は若い卒業生がそれぞれ地方にあって、その土地の校友会のため役員となり、委員となって奉仕することはその人の人生に大きなプラスになる恩寵を与えられるものであることを信じ後輩の皆さんに強く進言したいと思う。母校を愛し母校にプライドを感じ、母校のため変らぬ愛情を保持してゆくことは大切な資産であることを身をもって体験したことである。

（大正大経卒・関西国際学友会常務理事）